

## 【コンペティション II 総評】

審査員であると同時に、観客の一人として心から楽しむことが出来た。一度に 10 作品を堪能することができ、ショーケース公演とは新しい何か・誰かに出逢う可能性を秘めているのだと改めて気付かされた。特にトップバッターを飾った片山鉄生たちの作品は、10 年後、20 年後のコンテンポラリーダンスの未来を期待させてくれる力強い作品だった。

コンペティションである以上、受賞する人とそうでない人が出てしまうことは事実だ。でも新しい観客や、共に切磋琢磨できる人たちとの出逢いほど大きなものは無いだろう。同時に「振付家ひとりの名前でエントリーする必要があるのだろうか？」ということを考えさせられた。作品は決してひとりでは作れない、だからこそその難しさや醍醐味があるのだと思う。

考え方や作り方は時代と共に変化していく。そのことを楽しみ、柔軟に対応しながら、アーティストと共に歩むコンペティション II であり続けることが、とても大切なことなのだと感じた。

加藤弓奈（急な坂スタジオ 館長）

去年の私の総評の一部に、「コンテンポラリーダンスだから世界観を演出しなければと考えるのではなく、まずはダンス（身体）が重要なのだと言う事を第一に押し出してくれる若者が増えるとよいと感じます。」という内容を述べさせていただきました。今年のコンペ II はこの点において非常にレベルの高いダンスが多く見受けられたと感じました。一位、二位の争いというよりは、クオリティー、パフォーマンス、オリジナリティー、における、ベストダンサー賞を与えたい振付家が多かった事が審査の中での大きな議題でした。ダンサーとして優れている作品が企画自体を盛り上げていたので、観に来た観客もとても満足のいくコンペであったことは間違いないと思われます。中でも、声を大にしてこの場で私が触れておきたいのが、片山鉄生さんの作品についてです。おそらく多くの方が彼の作品に魅了された事でしょう。幼き頃から彼をダンスの道へと導いた〈んまつーポス〉に脱帽。彼はプロフィールに「どうしたら僕らは〈んまつーポス〉ダンスの先に行くことができるか実験中」と述べている。まさにその言葉に期待します。いい意味で片山さんの作品への取り組み方は、〈んまつーポス〉の先を行っていると感じます。何故最優秀新人賞を取れなかったのかという本当の意味をこれからも探究し、是非ともさらなるオリジナリティーある作品を創作していただきたい。

スズキ拓朗（CHAiroiPLIN 主宰、ダンサー、振付家、演出家）

今回の 10 作品にはひとつとして同じ傾向のものが見られず、若い世代のクリエイションの多様性と豊かさが頼もしい。

最優秀新人賞の福永将也『Contact Shots』は、映像と身体との関係を探究する。静止画として切り取られる画面上の身体と、舞台上に蠢く身体との間のズレが不思議な感覚を生む。映像やサウンドとの緻密な協働が光るが、それ以上に、何度も崩れ落ちる福永自身の身体の繊細な表情に惹かれた。奨励賞の外山陽大『僕 ㊦ 2』は、冗談なのか本気なのか判然としない、奇抜な世界が生まれていて面白い。テリー・ライリーの「In C」に果敢に挑んだ高橋灯『Reincarnation』の流麗な踊りはベストダンサー賞にふさわしい。ぜひ「In C」全曲に挑戦してほしい。

今回もっとも衝撃だったのは、13 歳の片山鉄生による『ハードルを飛び越しなさい、しかし斜めに飛び越しなさい』。幼稚園・小学校のころから〈んまつーポス〉のダンスに接してきた 4 人の中高生は、〈んまつーポス〉が危険な綱渡りを何度も繰り返してついに発見した〈反ダンス〉の方法論をすっかり自家薬籠中のものにして、ごく当たり前のように舞台に息づかせている。まさにネイティブ・コンテンプラリーダンス。今回の作品は〈んまつーポス〉の過去作のモチーフによる優れた変奏だったが、そう遠くない将来、完全オリジナルを携えてコンペ 2 に再挑戦する日が待たれる。

浜野文雄（新書館「ダンスマガジン」編集委員）

ファイナリスト 10 名の、作品へのアプローチの仕方がそれぞれ独特で、改めて、振付というのは身体の動きだけで成り立っているのではなく、どのような人間が、誰と踊るのか、時間・空間・音とどう関わるのか、身体を起点にして、その場に存在する全ての要素と関係を作っていく行為だと感じました。福永将也の『Contact Shots』は、カメラ、モニターという舞台装置、空間全体を支配するほどの力強い音響を用いることで、身体が存在が、10 分という時空間の中で拡大・収縮し、多次元に浮遊するような感覚があって新鮮でした。ちょっと言葉にし難い感覚で、この言い方が完全にしっくりくるわけではないですが、ポジティブな謎があったのは確かです。外山陽大の『僕 ㊦ 2』は、ご自身のキャラクターと破壊力のあるジャンプを生かした突拍子もない物語展開に思わず笑いが込み上げる瞬間が何度もありました。高橋灯の『Reincarnation』は、テリー・ライリーの『In C』という楽曲に対し、生き物ゆえの根源的なテーマを表現するために、「背骨」を振り付けるという試みが潔くて良いと思います。賞には入らなかったですが、片山鉄生らの作品には心を動かされるものがあったのは間違いなし、大堂智子の演歌を歌いながら次第に狂っていく人間の有様にも興味を惹かれました。ここで生まれた作品の種が、雨風を経ても光のもとで芽吹きますように。今後の便りを心待ちにしています。

吉開菜央（映画作家、ダンサー）